

紹介

白峰村史編集委員会編

白峰村史（資料篇）

本書は白峰村史の下巻に当り、明年刊行予定の沿革篇の上巻と合わせて村史として完成のはずである。輪島町史をはじめここ数年間に多数の石川県下の町村史を手がけた若林喜三郎氏が編集主任となり、金沢大学の教官等十数人のそれぞれ専門家の参加を求め、多数の村民の協力を得て編纂された。

白峰村は石川県の東南隅に位置し、白山山麓にあつて、同県下でも最も深山奥地を占めまた全国屈指の深雪地帯でもある。きびしい自然の制約の下に、山むつし（焼畑）、出作、出稼の村として、北陸ではよく知られた山村である。本村は旧牛首十八カ村の内に属し、能美郡に属したが、終戦後に石川郡に編入された。この十八カ村は、白山神祠造営に関する係争に端を發し、越前・加賀両藩の訴訟事件となり、寛文六年幕府は上知させたもので、この内尾添・荒谷二カ村は加賀領であつた。

手取川の水系に属するに拘わらず、他の牛首十六カ村は越前大野郡に属し、明治五年石川県の管轄となつたので、同村の人文的關係は近時まで大野郡地方と最も密接であつたのである。

本書は、部落民家配置図をはじめ社会・農林業・交易・商工業・衣食住・民謡・伝説と昔話・方言・地名図の各項について図表・統計表等を掲げ、文化財・古文書を集めている。本村の如く広大な地域に互り複雑な地形に所在し、しかもきびしい自然環境の下に、社会生活・生産・風俗習慣に特異な内容を保持してきたところでは、このような資料の調査集積は極めて適切なものといえる。かつまた、泰澄以来の長い山嶽信仰、白山崇拜の伝承と歴史に覆われ、行政管轄にも幾多の曲折を経ってきたこの地方においては、なおその感を強くする。（白峰村役場発行、昭和三四年四月刊、九二四頁）（小葉田 淳）

若林喜三郎編

山中町史

石川県江沼郡山中町は古来温泉と漆器の生

産によつて知られ、さらに昭和三〇年の合併で九谷焼の九谷をもその範域に含むこととなつた人口約八千の町である。本書は、白峰村史と同じく金沢大学若林喜三郎氏の編著にかわり、第一部山中町の自然環境と戸口（七九頁）、第二部山中町の沿革（一五七頁）、第三部温泉と生産・交易の發達（二四〇頁）、第四部風俗の変遷と社会の進歩（一五四頁）の四部からなり、附録として史料篇（一九二頁）、合併後の重要事歴、人物誌、年表を掲げている。

山中温泉は行基以来の伝承を有するが、その記録として信憑しうる最古のものは文明年間まで下らなければならぬ。しぜん、叙述は戦国以降に比重が大きく、ことに「農業を専らにして湯宿はかせぎと心得」「湯は田之養ニ茂罷成申ゆ」といつた徳川封建制下の特殊な規制をうけた温泉町・温泉宿のあり方が興味深く語られている。しかも、そのような「町」としての性格が、近在真砂村の木地屋に発祥する山中漆器の市場生産展開への有利な要因となつた。いまや、大衆的飲食器を中心に全国最高の年産額を誇る山中漆器は、その出発点から問屋（初期には温泉宿が兼業）

と直接生産者との分離を特徴としてもつていたのである。この発展を背景に、本地脱業から派生した自転車リム製造工業が近代工業としての面目をととのえてくる。わが国の土着産業が近代化に際して当面し、かつのりこえてきたさまざまな問題がここで提示されている。

全体として、明治以降に相当の紙数をさき、山中が元来有していた冬型の温泉という性格が近時春秋の行業期型へと変つてきていること、浴客の地域分布が全国的に広がりとつあること、浴客数と景気変動との関係、観光宣伝の歴史の変遷等々が、わかりやすいグラフや写真で示され、「読ませる町史」の形をととのえている。これらは、現実の町政の指針として役立つであろうとともに、現代社会における温泉の機能を考える上に、甚だ珍重すべきデータの数々を提供しているやに思われる。(山中町史刊行会発行、昭和三四年一月刊、八八六頁)

(朝尾直弘)

劉志遠編

四川漢代画像磚芸術

重慶市博物館編

四川画像磚選集

画像磚についての要を得た説明は、岡田芳三郎氏が本誌四十一巻六号に述べておられるから(一六九頁)、参照して頂きたいが、その所で岡田氏も述べておられるように、未だ画像磚に対する本格的研究はなされていない。ここに取上げた物も、写真や拓影を録したに過ぎないが、ひごろ文献資料を使つて、漢から三国へかけての四川の歴史を考えている筆者にとつては、それはそれなりに、図を眺めていると、種々の事を感じさせてくれるので敢て紹介の筆を取つた次第である。

そこで何故に漢代の四川が斯くも重視されるのか、これらの書が、四川研究の上でどのような位置が与えられるのかということを紹介にすることが、迂遠のようだが、却つて紹介には捷徑ではないかと思う。

四川地方は前四世紀の末、秦の領土に入つて以来、開発が進められ、灌漑設備の完成、

塩井の開鑿、商工業の進展は、この地方の経済的水準を著しく高め、豪族が生長し、三国蜀の独立をもたらすのである。史記の貨殖列伝には、この地によつて富を築いた幾人かの人の物語が記されているし、「華陽國志」とう書は、漢代に豪族がどのように生長し発展していったかということ述べている。所が最近の考古学的研究の著しい進歩は、更にその当時の姿を、具体的に示してくれるようになった。格別に四川省出土のもの、上層階級だけでなく、その当時の一般の人々の生活の実態、特に生産の実情を示すものが含まれていることが特徴的なので、一段と注意されるのである。因に最近、岡崎敬氏が考古学雑誌四十四巻二号に「漢代明器泥象にあらわれた水田・水池について——四川省出土品を中心として——」と題して、明器泥象の面から、この特徴を論ぜられている。

四川省地方に対する考古学的調査は、すでに今世紀の初めから欧米人の手でなされていた。その後今回の日中戦争中國民政府の重慶遷都に伴い多くの学者がこの地に來り、考古学的調査が熱心に行なわれた。こうして今世紀の前半に発掘された画像磚は、Richard,